

令和4年度ふくい教育フォーラム 開催報告

テーマ「教育DXで拓く福井の未来」

令和5年3月7日～9日開催（オンライン・ハイブリッド）

3月7日（火）1日目（オンライン開催）

時間	No	発表タイトル	発表者
13:30～13:35		開会挨拶・諸連絡	
13:35～14:00	①	全教職員で取り組む教育DX	灯明寺中学校 新宅常朗
14:05～14:30	②	いつでもどこでも誰とでもつながる環境づくり	上庄中学校 飯田吉則
14:35～15:00	③	PowerAppsアプリによる日常業務DX	附属義務教育学校 河合創
15:05～15:30	④	多方面の「つながり」の中で、自分に自信をもてる生徒を育てる	大安寺中学校 北島正也
15:35～16:00	⑤	Chromebookの活用例	西津小学校 川嶋一晃
16:05～16:30	⑥	提案型ビジネスによる学校事務のアップデート	みそみ小学校 浦谷時生
16:30～16:35		諸連絡	

3月8日（水）2日目（オンライン開催）

時間	No	発表タイトル	発表者	No	発表タイトル	発表者
13:30～13:35		開会挨拶・諸連絡				
13:35～14:00	⑦	児童が意欲的に天気を予報するための2つの手立て	松原小学校 石田健悟	⑧	SLACKで英語授業実践交流、働き方改革	三国中学校 江澤隆輔
14:05～14:30	⑨	iPadの効果的活用	国高小学校 田中祐輝	⑩	プログラミング教室実践報告	武生商工高校 渡辺賢
14:35～15:00	⑪	クラウドを教員が使えば、子どもも使う！授業が変わる！	社西小学校 尾川智子	⑫	主体的な生徒物理実験の開発研究	若狭高校 野坂卓史
15:05～15:30	⑬	教師協働でつながる・広がる学び	平泉寺小学校 寺島亮太	⑭	学校を魅力化しつつ多忙化を解消するには	美方高校 岩本守聡
15:35～16:00	⑮	Let's enjoy English together !!	西津小学校 大下芳徳	⑯	高校通級における社会適応を目指した取り組み	武生高校定時制 小林就彰
16:05～16:30	⑰	デジタル・シティズンシップ教育×育てる生徒指導・教育相談	教育総合研究所 有田留美子・林みどり			
16:30～16:35		諸連絡				

3月9日（木）3日目（ハイブリッド開催）

時間	No	発表タイトル	発表者
9:55～10:00		開会挨拶・諸連絡	
10:00～10:35	⑱	アプリ「バーチャル転校生」の活用を通して	足羽中学校 向井敏幸
10:40～11:15	⑲	ICTの効果的な活用方法の研究	足羽第一中学校 前川友樹
11:20～11:55	⑳	タブレットが文房具になるような日常的な活用方法	三国南小学校 高橋正晃
12:00～12:35	㉑	1人1台端末の文房具化	明新小学校 高井豊一郎
13:45～14:50	㉒	教育シンポジウム …午前中の発表者4名と講師による意見交流	
15:00～16:10	㉓	総括講演「ここまで来た！教育DX最前線」 講師 株式会社情報通信総合研究所特別研究員 平井聡一郎氏	
16:10～16:15		諸連絡	

実践発表①

全教職員で取り組む教育 DX

～生徒のタブレット活用、オンライン活用、校務支援を通して～

福井市灯明寺中学校 教諭 新宅常朗



発表では、校務支援、授業やオンラインでの活用における実践が紹介された。

灯明寺中学校では、Jamboard や Keynote を活用した授業づくりや各教室からリモートで行われる生徒集会などの取り組みが行われていると紹介された。また、出勤できない教職員が自宅で部活動指導を行うなど、様々な状況に対応できる組織づくりについての取り組みも紹介された。校務支援においては、生徒だけでなく、教師自身も1人1台タブレットを使用することで、学校内のどの場所からも連絡事項の書き込みや確認などを行ったり、生徒の出欠について共有したりすることについて紹介された。

質疑応答では、Keynote を使用する理由は何かという質問に対し、発表者から生徒の端末に Keynote が入っているため取り組みやすいという回答が示された。また、タブレットを活用する上で工夫していることは何かという質問に対し、夏休みの現職教育以外にもミニ研修会を設け、教師役と生徒役に分かれてタブレットの活用方法について学び合っているという回答が示された。

実践発表②

いつでもどこでも誰とでもつながる環境づくり

大野市上庄中学校 教頭 飯田吉則



オンラインによる会議や授業を積極的に行った成果と課題を示した。タブレット端末を必要数確保し、タブレットを固定するためのアタッチメント、マイク付きイヤホン、音声スプリッター、音声ケーブルなどを購入し、環境を整備した。

①校内会議、市内研究部会、PTA 部会をオンラインで開催

会議室準備や移動時間の削減、ペーパーレス化を促進することができたと報告された。

②学年閉鎖中および出席停止中の生徒に対するオンライン授業

全ての活動で配信可能だが、生徒の参加状況を記録する工夫が必要であると報告された。

③市内学校とのオンライン交流授業

適度な緊張感を持ちつつの対話は、生徒の資質・能力を育成するのに効果的であり、教師同士の協働体制ができるが、音声トラブルがないかを確認する必要があると報告された。

質疑応答では、オンライン交流授業までに使い方の指導などはされているかという質問に対し、発表者から接続テスト時に接続の確認と併せて指導しているという回答が示された。

実践発表③

PowerApps アプリによる日常業務 DX

福井大学教育学部附属義務教育学校 教諭 河合創



発表では、PowerApps アプリによる日常業務の効率化について報告があった。日常業務は、朝の出欠連絡確認、健康観察から始まり、職員連絡及び生徒連絡、一日の流れ、委員会や部活動の連絡、予定など、確認すべき情報がたくさんある。そのため、複雑で煩雑になりがちな情報を一元管理する取組みを行っていると紹介された。このシステムはMicrosoft365のExcelを活用したアプリで、直感的に使用できるものであった。また、教師への連絡や生徒への連絡ごとにタイトルに色を付けることができ、視覚的にも分かりやすいものであった。このシステムの仕組みを簡易的に利用して作成した学習アプリについても紹介があり、参加者にその魅力を感じさせるものであった。課題では、アプリの普及には専門的な知識が必要であることや、本来はアウトソーシングすべきで市町村単位でシステムが導入されているとよいと説明があった。質疑応答では、発表者以外にこのシステムを管理できる人がいるのかという質問があり、1人で作成したため、後継者について考えなければいけないという回答があった。また、出欠の情報の漏れがあった場合の対処法については、データは残っているので反映に時間がかかることがあるが、後で確認は可能と具体的に回答していた。

実践発表④

多方面の「つながり」の中で、自分に自信をもてる生徒を育てる

福井市大安寺中学校 教諭 北島正也



発表では、社会科の授業において、生徒とともに課題を設定し、解決に向けて生徒同士の話し合いを中心に課題を追究したり、OPPシートを活用して学習の意味や価値を見いだして学んだりする取組みや、オンラインによる進路説明会、Microsoftの機能を活用した協働学習の例などが紹介された。小中学校が密接につながる小規模校の強みを生かして、学校全体で「まなぶちから」を意識した活動を行って各教科で生かすことを目指しており、事前準備や事後研究会をできるだけ簡略化した授業公開を日常的に行っていることも紹介された。

質疑応答では、限られた中で効率的にするための工夫に関する質問があり、発表者からTeamsやまなびポケットのタイムラインを活用してリアルタイムに対応していくという回答が示された。また、オンライン説明会の保護者の反応については、いくつか質問事項が来たが否定的な意見はなかったこと、社会科の授業で問いを引き出すコツについては、振り返りを行い、その振り返りを共有して話をさせ、感想や意見が分かれたところから新たな問いを見いだしたり、生徒の興味関心を引き、課題を見いだすことができるような資料を準備したりしている、といった回答が示された。

実践発表⑤

Chromebook の活用例

～Google クラウドでできること～

小浜市立西津小学校 教諭 川嶋一晃



発表では、Chromebook の普段の学校生活における活用例と、授業における情報共有の活用例の実践が紹介された。

普段の活用例として、①ストリームの掲示板を使って、予定や担任からのメッセージを連絡する、②脳トレタイムを使って、タイピング練習や文章入力に取り組む、③Meet で学年集会を行う、④質問機能を用いて出た結果を共有し、話し合い活動に活用するなどの取組みが紹介された。

情報共有の活用例として、①写真を共有し、校外での調査結果をまとめる、②Jamboard や質問機能で児童が考えを共有し、話し合い活動や新聞作成をする、③スライドファイルを共有し、共同作業でスライドを作るなどの取組みが紹介された。

質疑応答では、Chromebook の活用を促進するために西津小学校で使っている「スキル系統表」を作成する際に、参考にしたものは何かという質問が出た。発表者より、各担任から出された ICT 支援員への質問や、Chromebook 活用状況報告などを参考に作成したと回答があった。

実践発表⑥

提案型ビジネスによる学校事務のアップデート

若狭町立みそみ小学校 事務職員 浦谷時生



発表では、事務職員の視点から、財務マネジメントという専門性を活かし、①地域・児童に有効に還元する体育大会運用資金（寄付金会計）の余剰金運用による「オリジナルタオル」作成、②備品購入などイレギュラーな要望に対応する際に効率化を図る「教材備品等購入計画伺書」、③学校にあるデータを活用することで業務効率化を図る「卒業証書発注方法の変更」について、受託型から提案型にアップデートする実践が紹介された。教員の視点にはない、事務職員の利点を最大限活かすことで、多様な知識や価値観を交流させ、組織を活性化させることの有効性が提案された。

質疑応答では、余剰金や別会計の予算の決め方に対する教員からの要望への対応、オリジナルタオル作成の学校としての共通理解の状況について質問があったが、事務職員の視点から効率だけを優先した提案ではなく、教育活動全般を見据えた提案であり、多面的に見て共通理解をした上で進めているという回答が示された。また、卒業証書のデータ提供による氏名欄のデジタル化についての質問では、保護者や地域とも共通理解を十分に図ることが大切であるという回答が示された。

実践発表⑦

児童が意欲的に天気を予報するための 2つの手立て ～ICTを活用して～

敦賀市立松原小学校 教諭 石田健悟



児童が意欲的に学習に取り組むための手立てについての実践が発表された。第5学年理科「天気の変化」の単元において、実生活とのつながりや学びを生活に生かすことを実践計画の柱としていた。単元の導入では、天気に関係する仕事を考える場面を取り入れることで、実生活とのつながりを意識させていた。単元のまとめの場面では、zoomを利用し、長野県の小学校と遠隔授業を行っていた。福井県と長野県の天気の変化の共通点や差異点を捉えることで、学習したことを生活に生かそうとする態度の育成につなげていた。単元の学習後のアンケート結果から、「理科の学習は将来、社会に出たときに役に立つと思う」や「理科が関係する職業に就きたい」と回答する児童が増加していた。一方、ICTの活用を通して多くの情報に触れることができたが、児童が情報を扱いきれず、間違った認識をしているといった課題も見られた。視点を焦点化するなどといった教師のコーディネート の在り方を検討し、次年度の実践につなげたいと今後の方針を示された。

質疑応答では、間違った知識を訂正するための手立てとは、という質問に対し、発表者から児童同士で対話を通して解決に導いていくという回答が示された。

実践発表⑧

SLACKで英語授業実践交流、働き方改革

坂井市立三国中学校 教諭 江澤隆輔



発表では、SLACKというグループウェアを活用した英語授業実践交流について、発表者が「先生をつなごう・学校をつなごう・校種をつなごう」のミッションのもと、小・中学校、高等学校、大学の教員や教材会社社員をメンバーとするサロンを設立し、その中で授業の悩みを相談しあったり、授業の資料を共有したり、月1回のzoomオンライン交流をしたりするなどの活動が紹介された。

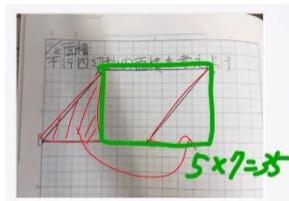
質疑応答では、①「運営は1人でやっているのか」、②「サロンに参加しているメンバーの年齢構成は?」、③「所属校での英語科での取組みは」という質問が出され、発表者から①「1人で運営している」②「6割が30～40代である。また、子育て世代の割合も高く、教材研究に十分な時間がとれない方がサロンに参加し、参加者で共有している資料を活用している」、③「個別最適な学びのためにICTを活用している。また、教材の作成を行っている」という回答が示された。

実践発表⑨

iPad の効果的活用

～算数科の実践を通して～

越前市国高小学校 教諭 田中祐輝



発表では、iPadを活用することによる思考の視覚化、共有化、焦点化、意欲向上についての実践が紹介された。

越前市国高小学校では、算数の授業でMetaMoji Classroomにワークシートを配付し、視覚支援、情報共有をねらいとした実践がなされ、学習意欲が高まったことや、平行四辺形の面積を求める授業では児童自身が思考の過程も分かるという効果が確認できたと紹介された。また、黒板に書いて説明するよりも焦点化させやすく、リアルタイムでの書き込みにより思考の流れが見やすいという教師側のメリットも紹介された。

Google Earthを活用した授業では、距離に関する興味を高めることに効果的である一方、面積が自動的に表示されるデメリットに留意する必要があるということが紹介された。

質疑応答では、MetaMoji Classroomが使いにくい場面はどう対応するかという質問に対し、毎日使用することでスキルが向上したことや、ホワイトボードの方が良い場合もあるため、使い分けが必要である、という回答が示された。振り返りについての質問に対しては、ノートに書いて写真に撮ったり、直接入力したりしているという回答があった。

実践発表⑩

プログラミング教室実践報告

～地域連携と学びのアウトプット～

福井県立武生商工高等学校 教諭 渡辺賢



発表では、武生商工高等学校における以下の取り組みについての発表があった。

①工業科の「総合的な探究の時間」について

工業系では3年次で課題研究を3単位実施（ものづくりによる課題解決型学習）している。テーマの設定については、生徒の興味関心に基づいて進めており、「人と接することが好き」という生徒なら、プログラミング教室の実践を通して「地域連携」につなげている、などの事例が紹介された。

②プログラミング教室の実践について

＜おもしろフェスタ＞…講義型：授業用のスライドを作成し実施

＜越前モノづくりフェスタ＞…体験ブース型：オープンスペースで実施

＜小高連携プログラミング教室＞…意欲の高い小学生が多数参加

生徒がトラブルに臨機応変に対応する経験を通して成長が見られたという報告があった。

質疑応答では、「実践して、生徒の進路につながった例はあるか」という質問に対し、「就職よりも進学した生徒が多かった」という回答があった。

実践発表⑪

クラウドを教員が使えば、子どもも使う！ 授業が変わる！



福井市社西小学校 教諭 尾川智子

発表では、「教員への研修と業務改善」と「ICTを活用した授業実践」について紹介があった。

「教員への研修と業務改善」では、ICT研修会において、授業や業務改善に役立つアプリを紹介したり、体験を通して教員のスキルアップを図るように工夫したりしていた。他に、欠席や遅刻等の連絡体制を Teams 上で行うようにしたことで、児童の出欠状況の把握が容易になったと報告があった。「ICTを活用した授業実践」では、ローマ字入力に継続して取り組んだことでタイピング技能が向上し、タブレット端末を用いて授業のまとめができるようになったと紹介があった。

成果として、教員がクラウドを使うことで、ICTを用いることの利点を知り、授業や校務支援等に積極的に活用する機会が増加したことを挙げていた。

家庭でインターネットに接続する際の不安についての質問では、文部科学省は家庭にタブレット端末を持ち帰る前提での活用を推進しているため、規制ありきでなく、タブレット端末の利点を最大限生かしてはどうかという回答を示していた。

実践発表⑫

主体的な生徒物理実験の開発研究

～生徒の科学的で探究的な学びから考える～



福井県立若狭高等学校 教諭 野坂卓史

発表では、これまでの、結果が担保された、いわゆるお料理レシピのような実験をやめ、科学となる条件（検証性、再現性、客観性）を備え、探究の過程に重点を置いた実験テーマを考案し、実践・分析した事例が紹介された。2つの生徒実験を、各5時間ずつ（テーマ提示、仮説検討・実験計画、実験、考察・まとめ、発表会、リフレクション提出）行い、生徒の実験時・発表時の様子、振り返りの記述を分析したところ、生徒主体の物理実験テーマを作成できたこと、問い方の工夫によって求める物理実験が成立する可能性があること、考察を行う過程で生徒が主体的な活動を行っていることが窺えたことが紹介された。

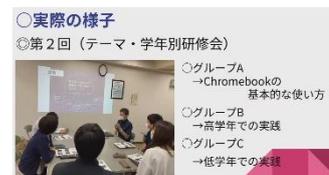
質疑応答では、「未知のものを明らかにする題材をどのように探しているか」という質問に対し、「科学史をベースにすれば、生徒も先人と同様な苦勞をしてくれるのではないかと考え、科学史をベースにした実験テーマづくりをしている」という回答が示された。「生徒が見当違いなことをしているときはどうしているか」という質問に対し、「生徒自身の気づきを大切にするため、そのままやらせている。生徒は、発表会で他の生徒からの指摘を受けたり、振り返りを行ったりする過程で、気づきを得ている」という回答が示された。

実践発表⑬

教師協働でつながる・広がる学び

～自主サークル活動を通して～

勝山市立平泉寺小学校 教諭 寺島亮太



発表者は勝山市内の教員のつながりを広げること、ICTの効果的な活用方法を研究すること、教育活動の悩みを共有し、実践への活力にすることを目的として、自主サークルである勝山市ICT研究会を立ち上げた。気軽に話せるように少人数グループで話し合う時間を設けたり、小・中学校どちらの教員も参加できるようにテーマや時間帯、日程を工夫したり、教育委員会や教育総合研究所などの外部機関を活用したりすることを意識して学習会を運営してきたと話があった。その結果、気軽に参加できる会となり安心して学び合うことができ、他校・異校種、他機関とのつながりを広げることができた。一方、年間計画を提示したり、ICT以外のテーマに対応したりすることができなかつたこと、参加者が固定化してきたことが課題として示された。今後、ICTだけでなく教科教育や学級経営などをテーマに学習会を開催し、「日常的な関わり」「気軽さ」「タイムリーさ」をキーワードに、学習会を継続していきたいと話があった。

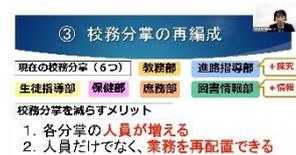
質疑応答では、研究会の運営に関する質問があり、主に発表者が企画運営を行っているため、多くの参加者に協力いただき持続可能な組織づくりをしていきたいという話があった。

実践発表⑭

学校を魅力化しつつ多忙化を解消するには

～探究を軸にした学校改革と、それに伴う業務改善の推進～

福井県立美方高等学校 教諭 岩本守聡



発表者の勤務校で設置されたビジョン委員会事務局の組織や取組みについて紹介された。若手や中堅を中心に8つの役職で構成され、生徒会に広報部の設置、事務局員で分担した高校説明会、探究活動の推進、探究学習の時間確保（ミカタタイム）、中高連携クラスの魅力化、制服の新調といった6つの具体的なビジョンで学校の魅力化に取り組んでいる。

一方、事務局員の多忙化が課題となっていることも示された。新たなビジョン委員会の立ち上げによるスタディサプリの活用や校則の見直し、校務分掌の再編など、多忙化解消の策についても紹介された。

質疑応答では、ビジョン事務局の年齢構成や男女比や運営委員会との調整についての質問があった。ビジョン事務局は20歳代から男女同数程度で編成され、各部署に担当を割り当てて探究のビジョンを共有しており、結果、生徒の地域愛の醸成が図られているとの話があった。

実践発表⑮

Let's enjoy English together!!

～小学校外国語科（英語）3年間の取組から見えてきたもの～

小浜市立西津小学校 教諭 大下芳徳



発表では、ALT との協働や ICT の活用に関する実践が紹介された。小浜市では、4名のALT と月に1回ミーティングを開き、授業進度や教材の指導方法、ICT の活用について共通理解を図っており、授業の打合せ等を効率的に行ったり、ALT の特長を活かして教材の開発を行ったりしていることが紹介されていた。

ICT の活用については、主に書き写しなどの復習課題や、オンラインでの交流学习、フォームアンケート機能を用いた授業の振り返りの際に活用した様子を紹介されていた。実践を通じて、通信のトラブルなど、不測の事態に備えた対策が必要であることを伝えていた。

外国語専科と中学校での勤務の経験から、より良い小中連携のために、小、中学校がお互いに学習内容を理解することと、組織的な取組みが必要であることを強調していた。

オンラインの質問者からは、ALT のミーティング内での協議内容について質問があり、ALT 4人に加えて発表者も交えて協議していることなどの回答があった。

実践発表⑯

高校通級における社会適応を目指した取り組み

福井県立武生高等学校定時制 教諭 小林就彰



武生高校定時制の生徒（特に通級生徒）が抱える「社会適応」という課題を克服するための具体的な取組みが紹介された。

通級指導は、これまでは個別指導だけであったが、令和3年度からは徐々に小集団授業に移行している。効果的な授業になるように生徒の組み合わせを考え、Google Classroom のストリーム上で気持ちのやりとりをしたり、コミュニケーションゲームなどの自立活動を取り入れたりしている。校内では、担任だけでなく、他の教員、SC、SSW が支援に関わっている。校外のフリースペース等とも連携して活動の場を増やしており、校外自立活動の単位認定についても働きかけている。卒業後の進路に向けて個別に支援し、在籍しながら就労移行支援を行っているケースもある。通級指導や個別の進路支援が「社会適応」に有効な手立てであり、学校と外部機関との橋渡しを教員が担えると述べていた。

通級指導をうまく進める上での課題は何かという質問に対し、生徒同士の相性を考慮した集団編成や通級指導の内容の校内周知が必要であると発表者から回答があった。

実践発表①

デジタル・シティズンシップ教育×育てる生徒指導・教育相談 ～小学校における実践と効果～

福井県教育総合研究所教育相談センター
主任 有田留美子 研究員 林みどり



デジタル・シティズンシップ教育を軸としたプログラムの作成および実践の有効性の検証、ネット関連の課題に対応した積極的な生徒指導の在り方の提案を目的とした実践について発表があった。小学校高学年を対象とした授業実践について、児童の様子やワークシート、保護者の声を取り上げながら、児童が自身のメディアバランスを見直してよりよい使い方を考える過程などが紹介されていた。教職員対象のアンケートからも、子ども理解やICT活用における指導方法や指導観に変化があったことが報告された。また今後は、課題を受けて、カリキュラム・マネジメント、福井県版ポジティブ教育プログラムとのコラボレーション、教員同士で学び合う校内研修の実施に取り組んでいきたいと述べていた。

各学年で年間どれくらいの時間確保が必要かという質問には、今年度はプログラム作成が目的だったが、来年度以降どの学年のどのタイミングで取り組んでいくかを考えていきたいという回答があった。また、ゲームを長時間している児童への指導については、他の児童と利用状況を話し合う中で客観的に振り返り気付かせるとよいという回答があった。

実践発表②

アプリ「バーチャル転校生」の活用を通して～デジタル技術がもたらす人の心理への影響～

福井市足羽中学校 教諭 向井敏幸



学校の授業では、意見が偏って議論が深まらないこと、多様な意見が出てこないこと、違った意見を言えず子ども同士が本音で語り合えないこと、肯定的な意見が多数で疑問や否定的な意見が出てこないことがある。そのような場面で、教師や少数意見の生徒の代弁者として発言し、学級という固定化された人間関係に新しい風を吹き込み、より深い学びにいたるものがバーチャル転校生の役割である。具体的な実践として、小規模校における道徳の授業で、正直に本当のことを言えるかどうか葛藤する場面が紹介された。「自分だったらみんなの前で正直に話す」という生徒の意見に対し、アバターからは「これからずっと学校で悪いことをした人と言われそうなので正直に言えない」という考えが出された。これを受けて、「気持ちもわかる」と生徒の心が揺れ動いた様子が見られた。福井大学の小林助教からは、教室では、嫌われるリスクを背負ってまで反論や疑問を言うことができない現状があること、生徒への悪影響があるのではないかと教師の不安によって多様な意見が言えない空気が教室に生まれていることが指摘された。アバターの役割として、教室の秩序を維持しながら本音を通した深い学びができることが紹介された。

実践発表⑱

ICT の効果的な活用方法の研究

福井市足羽第一中学校 教諭 前川友樹



学校教育の充実と業務改善にむけた ICT 活用の取組みが紹介された。「日常的に活用できる、使い勝手がよい、導入に手間がかからない、シンプルな設計」の4つのポイントを押さえることで、生徒たちの活用の習慣化・定着化につながり、教員の業務改善にもつながっていく。パソコンと iPad を利用し、様々なソフトを目的や状況に応じて使い分けている。発表では、授業の配信だけでなく、卒業式などの式典や行事の配信を行い、音声の取込に特に工夫を凝らして取り組んでいるという実践が紹介された。授業や業務において様々なソフトを使用することで生徒と教員にとって活用しやすいものを選び、教員の必要感に応じて研修を企画し、活用できる教員を増やしていった。

質疑応答では、問題採点ソフトにおいて解答に揺れがある場合はどのように採点しているのかという質問に対し、自由形式の場合、採点基準を決めた後に採点后、点数順に並べ替えて基準に合っているかどうかを振り返り、確認しているという回答が示された。また、授業の配信時に補佐する人はいるのかという質問に対し、慣れてきたら一人でもできるが、出席確認は授業者がすることが難しいため、二人で行ったほうが安心であるとの回答があった。

実践発表⑳

タブレットが文房具になるような日常的な活用方法

坂井市立三国南小学校 教諭 高橋正晃



「タブレットを文房具のように」という ICT 教育の目標のもと、取り組んだ内容が紹介された。校務分掌に GIGA 部会を位置付け、情報活用能力育成に関する年間指導計画の作成や、効果的なタブレット活用の計画・実践・評価・分析などを行ったことや、ICT 活用実践例報告会を各学期に行い、実践例の紹介と考察を行ったことが報告された。デジタル教科書を活用した実践や、「SKYMENU Cloud」を利用した対話的活動などの実践が紹介された。

成果として、1人の取りこぼしもなく全員参加型の授業を行うことができ、「主体的・対話的で深い学び」の実現が期待できること、教員の自己研鑽の意識が高まり、協働体制が確立できることなどが挙げられ、課題として、発達段階に合わせた目標基準設定の難しさ、タブレット端末や接続の不具合への対応などが挙げられた。

質疑応答では、目標基準の設定のどのような点が難しかったのかという質問に対し、学年によってどんなことをどこまでさせるのかを設定するのが難しかったが、市内の担当者で情報交換をし、共通理解を図って設定しているという回答が発表者から示された。

実践発表⑪

1人1台端末の文房具化

～教育のDX化による学びの深化～

福井市明新小学校 教諭 高井豊一郎



発表では、ipad 導入期から発展期にかけて、児童のタブレット活用が日常化するまでの環境づくりの実践が紹介された。写真や図への書き込み、思考ツールの活用に始まり、プレゼンテーションや福井新聞 e 刊を活用したスピーチ作成と発表、写真撮影の効果的な活用を経て、共同編集による子ども議会の取り組みに至る、インプットからアウトプットの両面にわたり、文房具のように 日常的なツールとして定着するまでの取り組み事例が提案された。個別・一斉・協働とあらゆる学習場面において、強力なツールである ICT を活用することで、より児童が主体的に学習に取り組み、情報収集能力や自己表現力・情報モラルを高めることができる教育の DX 化に向けた提案であった。

質疑応答では、家庭教育への効果について、スキルの個人差への対応について、新聞活用による効果などについて質問があった。スモールステップや教え合いにより全体的なスキルアップにつなげていることや、情報モラルについても個人で判断できるような教育の必要性について回答が示された。また、新聞を活用することで地域に関する興味や関心が高まり、見方や考えも広がる効果があるとの回答が示された。



3日目ハイブリッド会場
福井県教育総合研究所
大講義室



教育シンポジウム

教育 DX で拓く福井の未来

シンポジスト

向井敏幸氏（福井市足羽中学校）

前川友樹氏（福井市足羽第一中学校）

高橋正晃氏（坂井市立三国南小学校）

高井豊一郎氏（福井市明新小学校）

コーディネーター

平井聡一郎氏（情報通信総合研究所）

午前中の発表者4名がシンポジストとして登壇し、講師の平井氏によるコーディネートで進められた。

①各発表者によるセルフプロデュース

午前の発表者が、自身の発表内容の報告をした。



②「壁を越える」学校全体に拡げる仕掛け

「それぞれの学校の課題とそれをどのように克服したか」について、教員の意思統一が難しいことや児童間や教員間でのスキルの差が大きいことが課題として挙げられた。その課題を克服するために自分がロールモデルとして取り組み、仲間を増やしながら教員の協働体制を構築という事例が発表された。



③「学びのDX」学校のデザインの変化は？

「インプット中心からアウトプットする授業へ」が話題となった。自分の言葉でうまく



アウトプットするためのツールとして ICT を活用することや、ただアウトプットするだけではなく、アウトプットしたものに對してフィードバックすることが大切であることなどが発表された。

④ネクスト・GIGA 次のフェーズのイメージ

「ペーパーレス」、「アウトプットの究極は動画」、「どんどん対話をして思考を深めていく」などが意見として出された。最後に、「学校 DX とは、学校そのものが新しい学びを生み出すことである」という言葉



でシンポジウムが締めくくられた。



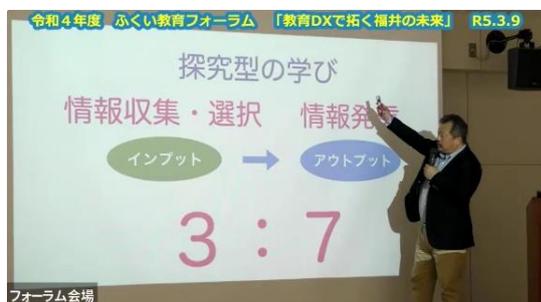
総括講演

「ここまで来た！教育DX最前線」

講師 株式会社情報通信総合研究所 平井聡一郎氏

講演では、これからの教育についてお話いただいた。これからの社会においては、学校で学ぶだけでなく、自分を常にアップデートし続け、生涯学び続けていくことが必要であり、「自ら考え、自ら判断し、自ら行動する」児童生徒の育成を支えるのがGIGAスクール構想であるという捉え方が示された。

また、ICTの活用の度合いをSAMRモデルに当てはめて考え、自校がどの位置にいるかを捉えて、クラウドを自由に使いこなしてやりとりをするような「児童生徒が学び合う授業のデザイン」を考えてほしいと訴えた。



さらに、高等学校において「総合的な探究の時間」が始まるなど、高等学校の学びが大きく変わっており、小学校、中学校においては、高等学校への接続を意識した学びを進めていくことが必要だと強調した。

これまでは一斉教授型の学びであったが、これからは探究型の学びを重視し、インプット、アウトプット、フィードバックが回る授業展開を考えてほしいと参加者に呼びかけた。

学習の個性化の中で、1時間単位の「ちっちゃなPBL」に日々取り組み、学習のまとまりごとの「中くらいのPBL」、3か月単位の「おっきなPBL」に取り組んでいく必要があるという提案があった。また、児童生徒に考えさせたいことや活動させたいことを絞り、学校行事などでPBLに取り組むことも考えられると述べ、学校教育のDX化を進めるにあたっての重要なヒントを提示していただいた。

